

これがレギー博士に傳へられたのも、矢張り同氏に依つたものと見え、昨年七月末（？）に接手した博士からの書面にその旨が記され、且つ佛譯のものは讀んだが、若し餘分があるなら日本文のものをも贈つてほしいとのことであつた。怠り勝ちの自分がそれに應じて兩種の拔刷を發送したのは、その後十日餘りも經てからのことであつたと記憶する。自分の小研究が印刷せられて伯林に届いたのが、既にミュラー博士の物故せられた後であつたのは遺憾であるが、キュセン即ちクシャナ（貴霜）語の佛典から作成したと考へしめた或るトルコ文佛典が、實はキュセン即ちクチャ（龜茲）語から作成せられたものであることを博士の存生中に傳へ得て、その持説を支持し得たことは、今にして憶へばせめてもの心遣りである。

博士はその専攻せられた學問の關係からでもあるが、我が國の東洋學研究の成績を甚だ尊重せられた人で、相つて現はれる論著については、その書名や題目、出來得れば内容の梗概をも併せて、英・佛・獨何れかの言葉で紹介して欲しいと度々希望して居られた。これは單に博士一個人、若くは歐洲の東洋學者の欲求としてのみ聞き流すべきではなく、我が學界の擧げた成績を廣く世界へ紹介して、學術的にも躍進日本の眞相を傳へることに於て最も意義あることで、當に自から努めなければならぬところである。現在國際文化の振興に努力せられる機關などに對して、その實現を切望して止まない。日本の學界が氣になるなら、日本語を學べばよいではないか、などゝいふ近視眼的議論に對しては、更めて辯を費す要はない。こんなことを書き附けることが、今は亡き博士の希望の實現されることに、何かの機縁ともなり得れば幸である。